



中高生とともに差別と闘う

「無知は宝の山」

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）



自分を語る人権学習

高二のAが語る川崎病。誰かが発する「ひとこと」の大切さ。

高一のSが語る「個性について」から死刑制度に至るなかで議論された、「平行線て手をつなぐ」という行為。それでも手をつなぎ合おうとする勇氣や知恵、根氣強さ。私は語り合うことの大切さを、子どもたちからあらためて学ばせてもらった気がします。

最後の人権を語り合う中学生交流集会、講演会パネリスト。三人目は、高校二年生のM。内容は、「ハンセン病問題と父母について」。話は、前年に人権こども塾一泊研修で訪れたハンセン病療養所での夜の研修の場面からはじまりまし

「そこで私がマイクを握って話したこと。なぜあのとき、あの話をしたのかっていうことについて話したいと思います。」

何を話したかというと、自分の親のことについて話しました。私の両親は難病を持っています。今も、この医療が発達したなかですが治りません。治療法は見つかっていません。両親とも病氣は違いますが、それで毎日薬が手放せない生活を送っていて、母はそのことを隠しながら仕事をしています。父は去年転職して新しい仕事をやってるんですけど、障がい者雇用として働いています。」

「無知は恥」、か

そんなMがハンセン病元患者から、一切家族とは交流していない、年に数回は会えても離れて暮らした

ている、と聞かされた話を、自分に落とし込んで語ります。

「自分がもしその立場だったら、私は耐えきれなくなって思ったんです。私は両親のこともそうですけど、妹のことも尊敬していて。両親は病気を隠しながら仕事してたり、就職差別にも遭った当事者で。コロナ禍にちように緊急事態宣言が出た最中に入院したことがあったんですね。父が。そのときってやっぱり面会謝絶で、誰も面会でできない状態で。三カ月ほど離れて生活していました。自分はそのとき小学校四年生か五年生だったかな。すごくつらいし、寂しい思いを経験しました。けど病院では父もつらい思いをしているだろうし、しんどい思いをしているだろうと思うと余計につらかったし、会えない、電話でしか話せないっていう状況が続いたのがすごくストレスでした。

でもそのことを周りの友達に言ったら、Mの家は何かちよつと違ふよなみたいな反応をする子が多い。それがすごい悔しくて。他の家と比べるとではないのに、今頑張っている父と母がいるのに、そんな反応されたのがすごく悔しくて。

ハンセン病のことを学んだときに、元患者の方たちの思いについてのが、自分事のように思えてすごく悔しかったし、その日に詳しく学んでいくにつれて、二度と起こしてはいけないことだなんていうのを感じました。

夏休みにそのことについて作文を書いたんです。自分の思いを最

後に書いたんです。私は、『無知は恥』だなんてすぐく思って。何でもそうなんですけど、いろんな人権問題に通じる部分があると思うんです。新型コロナウイルスとかハンセン病問題とか狭山事件もそうですし、いろんな人権問題って、正しい知識を知らずに間違って理解してしまうのはすごく怖いことだし、いけないことだなと思うんです。自分の学校とか、ここにいるみんなとかにもちゃんと正しい知識を知って、人権意識を変えて、他人事ではなく自分事に捉えて、人権問題を少しでもいい方向に持っていくたらって思います。」

無知は宝の山

個人的には何度も聞いた話ですが、知らない大勢の前で話したのは、これが初めてではないかと思っています。個人的なことといえませんが、それでも自分や家族のことを、切々と、堂々と語り切る姿は尊いとしか言いようがありません。賛同の意見も飛び出したほどでした。

ところがこの発表に、待ったをかけた者が出てくるのです。一人目に発表をしたAです。

「無知なことが恥なのか。知らないということが恥なのではなくて、知らないということがそのままにするっていうことが本当に恥ずかしいんじゃないかなと思って。たとえ無知な状態であっても、知ろうとする、その意思がある人は、恥ずべきことじゃないんじゃないかなって、今日の話を聞いて思いました。」

確かにそうです。でも、異論を唱えるには勇気が必要です。受けとめようによつては、対立の構図になリかねませんから。でもそうではなく、仲間と知恵を出し合ひ、深掘りしていくことで、新たな気づきが生まれます。知らないことを知ったとき、震えるような感動やよるこびが生まれます。それは、その場にいるみんなの共有財産となり、次に踏み出す一歩へとつながるのです。言葉を重ね、知恵を台わせ積みあげていくことの大切さ。そう思うと、無知とはあながち悪者ではなく、実は「宝の山」だったリするのではないかと思うのです。

人権こども塾もそうです。困難さの只中に置かれなければ生まれなかつたかもしれません。そう思うと、生みの苦しみはあれど、苦しみてなお、それを越えて余りある生みのよろこびがあるように思うのです。

あらためて、語り合う経験の必要性と重要性を感じます。自分と異なる意見や考えをすぐにシャットアウトし、敵視しがちな風潮があります。それは本当にもつたいないこと。分かり合える可能性に蓋をしてしまうかもしれないからです。

こうして最後の中学生集会は、高校生たちの踏ん張りもあり、三十年の歳月に幕を降ろしました。

中学生集会の全記録は、T.O.V
er人権教育研究所HPからご覧
いただけます。